武士遺跡出土の関西系土器群の再評価

加納　　実

1．はじめに

市原市の武士遺跡から出土した縄文時代後期の関西系土器群について、類例の検索をはかっていただきたいという趣旨から、資料紹介を行ったことがあった（加納1994　以下、旧稿と略す)。そのなかで、当該土器群が、東西の土器群の併行関係を推し量るうえで良好な資料であるという判断から、併行関係に関する若干の私見をも述べておいた。

残念ながら武士遺跡の報告（加納1998　以下、報告と略す）の際には、膨大な量の遺構・遺物の整理作業に追われることとなり、また、関西系土器群の編年的位置づけに関する評価が、旧稿の執筆時点と大きく変わらないこともあり、報告で個別に取りあげることはしなかった。

しかし、旧稿から報告にいたる間に、当該土器群を巡る様々な評価を頂戴することができた。報告者の責務と、諸氏からの評価を勘案した際、資料紹介以降の私見と、諸氏の評価に対する私見を述べることが、東西土器群の編年研究に僅かながら寄与するものと考え、ここに稿を草した次第である。

さて、武士遺跡出土の関西系土器群の編年的位置づけに関わる操作については、２つの方法が考えられる。ひとつは伴出した在地系土器群の編年的位置づけの検討であり、もう一方の方法は、関西方面での編年的位置づけの検討である。本稿では、関西系土器群の位置づけに関わる、この２つの方法を用いることとなる。したがって本稿での章たても、「関東での編年的位置づけ」と「関西での編年的位置づけ」となる。

なお、武士遺跡からは中期後半から後期前半の関西系土器群が出土しているが、本稿で取りあげる武士遺跡出土の関西系土器群とは、特にことわらないかぎり711号・712号土坑から出土した土器（図１）を指すことを申し添えておきたい。

2．関東での編年的位置

関西系土器群（図１）に伴出した有文精製の土器群は、おおきく４つに分類される。これらを示すと、

１類　称名寺式土器（図２－１～３）

２類　瓢形注口土器（図２－４）

３類　北関東から東北地方南部に出自を求め得る土器群（図２－５～８）

４類　三十稲場式土器風の土器

となる。

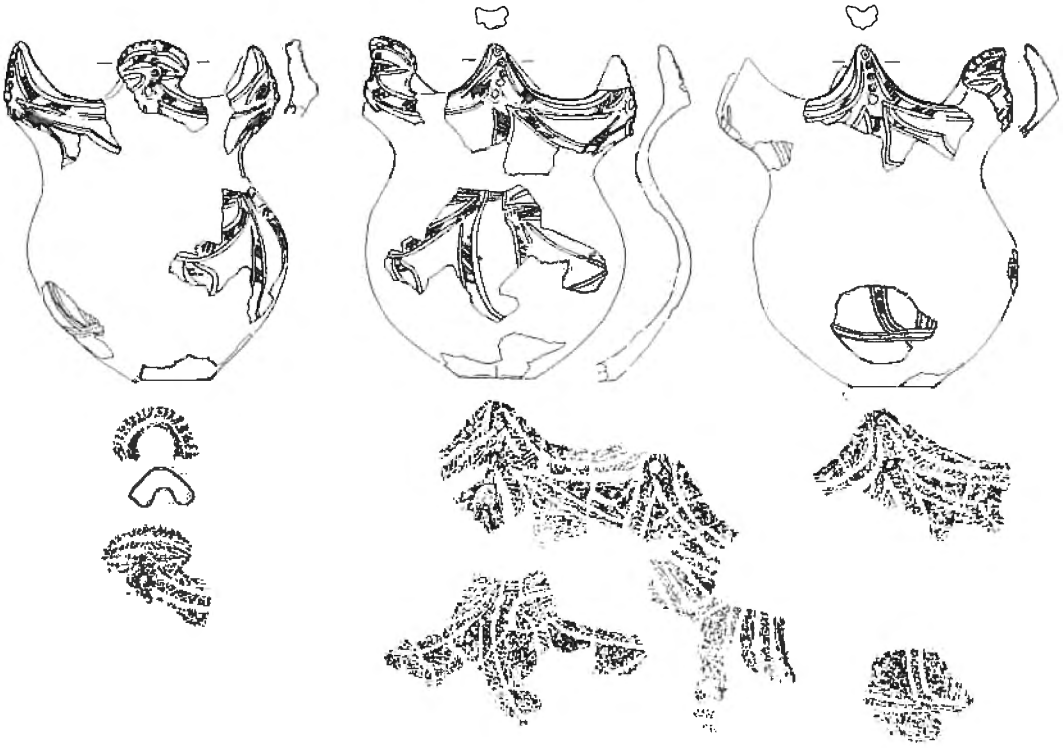

図１　武士遺跡出土関西系土器群

ここでは、これら各類の土器群の編年的位置づけについて、旧稿の執筆以降の私見を含めて述べておきたい。なお、４類とした三十稲場式風の土器については本稿での分析の対象外とする。

ａ　１類　称名寺式土器（図２－１～３）

旧稿では、関西系土器群に伴出した称名寺式土器を、近年の細分成果（石井1993　鈴木1990b）に照らし合わせ、称名寺式土器最終末の第７段階に位置づけた。この認識は現段階でも変更はないものの、資料が破片であるために確実性に欠ける印象は否めない。

図３・４に示した土器群は、千葉県内で出土した称名寺式系譜の土器群のうち，その最終末段階を中心とする段階の土器群である。筆者は、意匠の崩壊の進行した土器群（図３－５・８）や、単沈線が口縁下に巡る土器群（図３－２～８　図４－１～６）は、称名寺式土器最終末段階であると同時に、一部は堀之内１式段階まで下る可能性があると考えている（加納1999b）。このような予測は、称名寺２式土器の準標式資料ともいうべき千葉県鉈切洞窟（金子ほか1958）の位置する館山市では、地理的に最古段階の堀之内１式土器が出土し難いのではないかという予測によるものである。当然そこには堀之内１式土器の定義も深く関わってくることとなるが、その定義づけは、簡単ではあるが後述し、詳細については別の機会にゆずりたい。

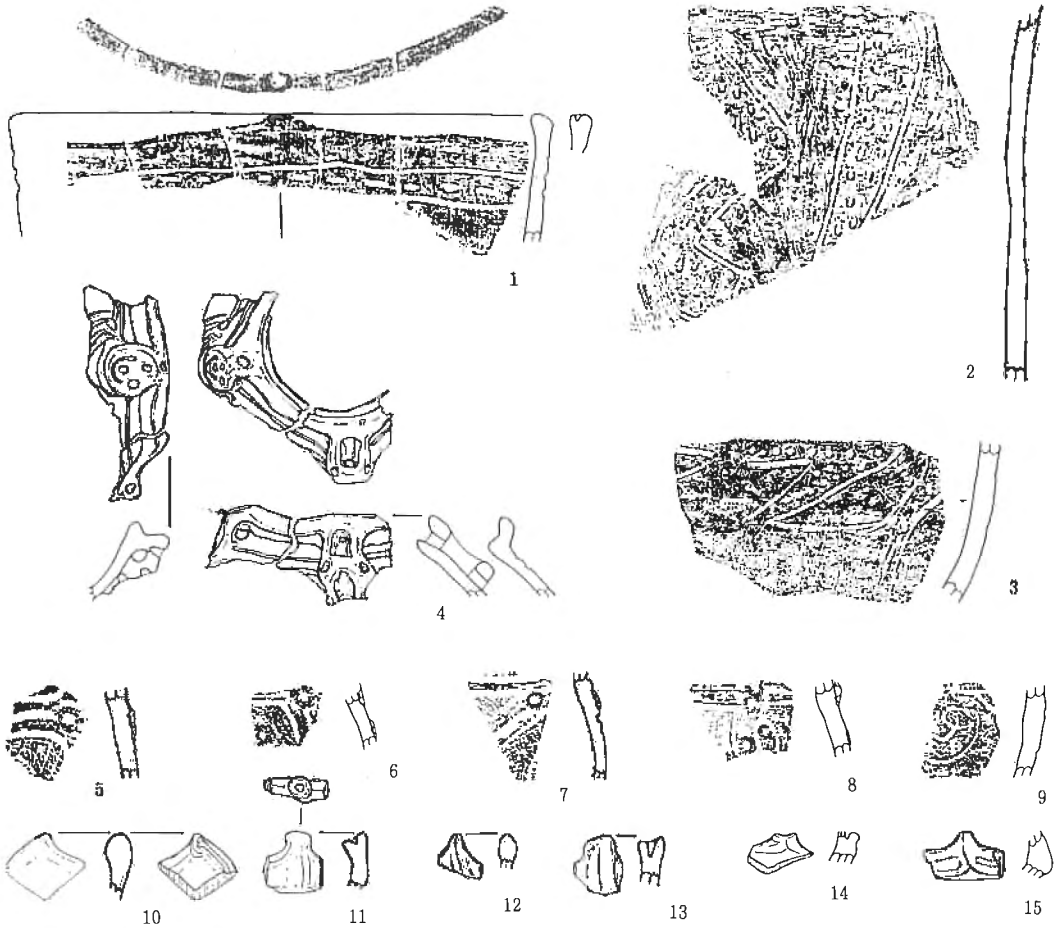

図２　関西系土器群に伴出する土器群

ともあれ、現段階では、図４に示した土器群などは、一括資料での検証はできないものの、堀之内１式段階に下っている可能性はあろう。しかし、千葉市子和清水遺跡10号住出土土器群（図５）や千葉市有吉北貝塚後期斜面貝層出土土器群（図６）の様相からは、現状では堀之内１式期に伴う可能性は明確にし難いようである。

子和清水遺跡10号住出土土器群（図５）は、住居跡の残骸とその周辺から出土した土器群であるが、古相の４を除けば概ね同一段階に納まる土器群であろうと考えられる。２は図４に示した称名寺式系譜の土器群と同一段階と考えられる土器群で、３は後述する千葉県横芝町鴻ノ巣貝塚例（図８－６）に後続するような、連鎖状貼付文系譜の、隆帯と刺突を有する土器群である。明確な堀之内１式土器を含まないことから、現段階では称名寺式期最終末段階に位置づけざるを得ない土器群であろう。有吉北貝塚後期斜面貝層出土土器群（図６）は、図示した土器群の段階での堆積がなされた貝層で、比較的短期間に堆積した貝層であると考えられる。１・

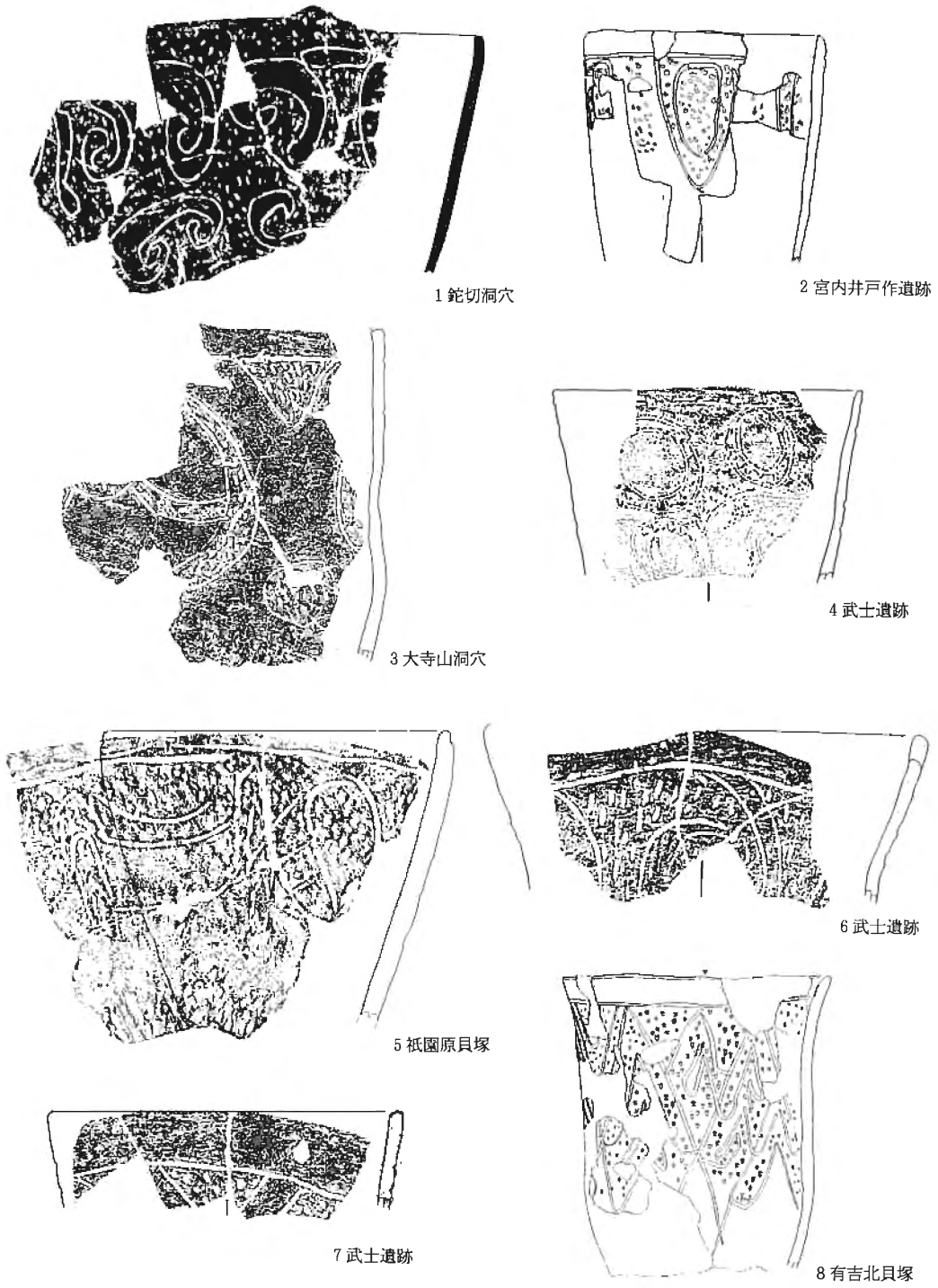

図3　称名寺式終末期の土器群（1）

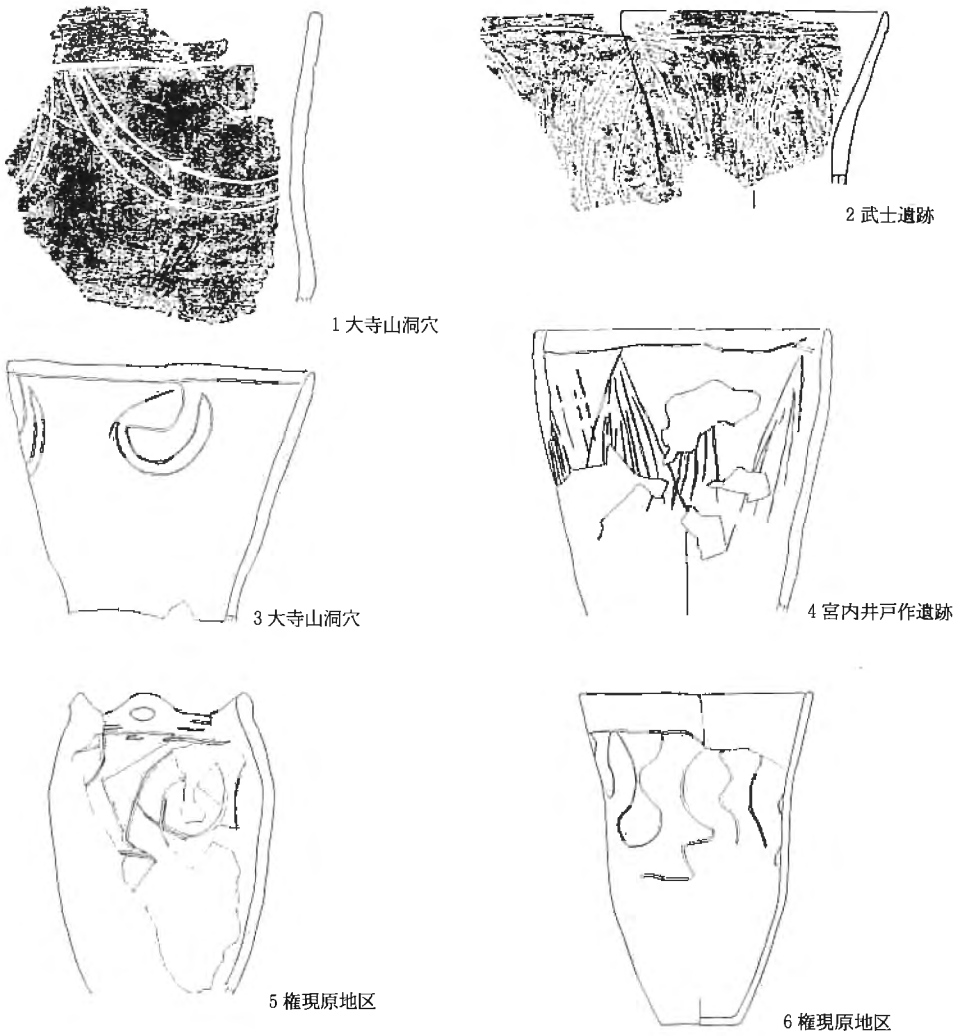

図４　称名寺式終末期の土器群（2）

10～14は、やはり、図３・４に示した土器群と同一段階であろうと考えられるが、このような土器群に15～24のような土器群が伴っている。小破片のため断定はできないが、17・19・23などは堀之内１式期の可能性があろうが、その他の土器群は明確に堀之内１式土器とは捉えがたい土器群であろう。16・18は鴻ノ巣貝塚例（図８）の12に、22は鴻ノ巣貝塚例（図８）の８・９・10に類似するものと思われ、全体的には、一部堀之内１式的な土器群を含むものの、称名寺最終末段階の可能性が高い土器群であると捉えられよう。

このようなことから、図４に示した土器群は、現状では明確に堀之内１式段階に位置づけることは困難であると考えることができる。したがって、図４に示した土器群よりも若干古相の

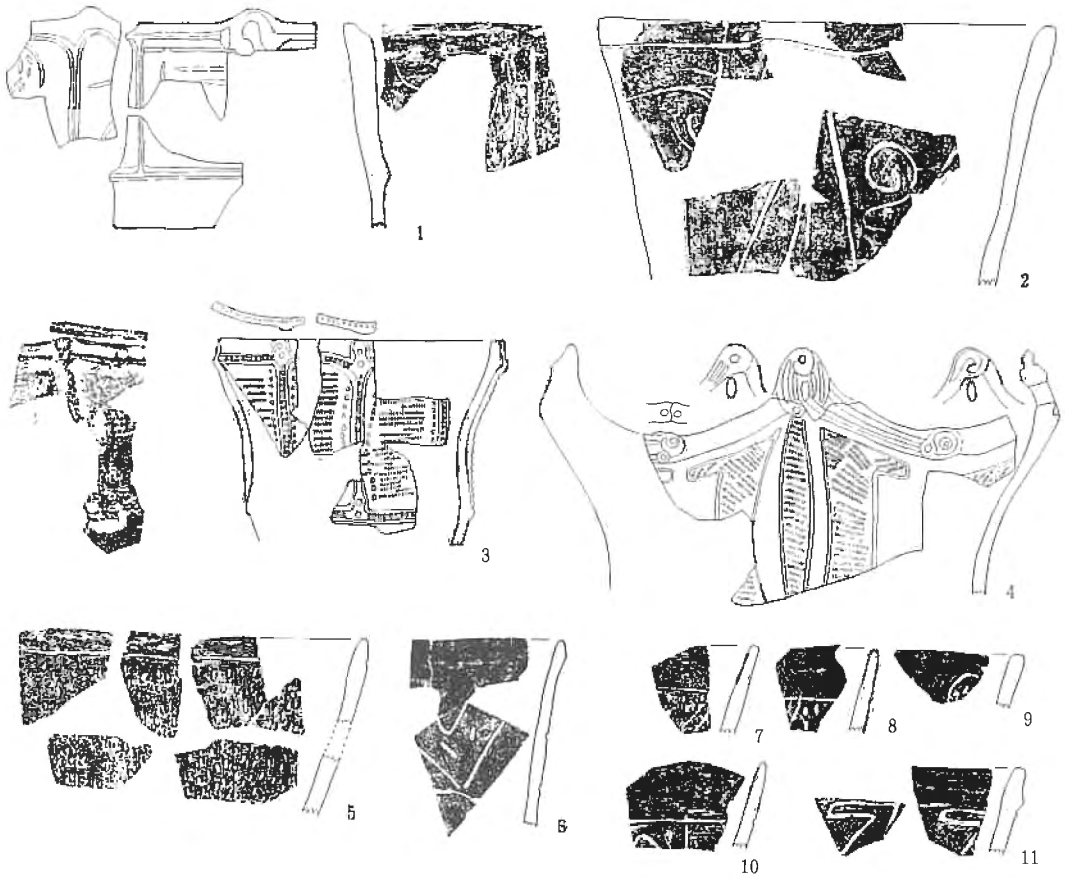

図５　千葉市子和清水遺跡10号住出土土器群

図３に示した土器群は、やはり称名寺式土器最終末段階に属するものと考えなければならない。このことから、図３に示した土器群と同一段階もしくは若干古相の図２－１～３は、明確に称名寺式土器最終末段階と捉えておかなければならないと考えられる。

ｂ　２類　瓢形注口土器（図２－４）

旧稿では、この瓢形注口土器を称名寺式土器最終末段階とした。この認識も現段階では大きな変更はないが、これらの土器群が称名寺式最終末段階に伴うという一括資料は千葉県内ではに乏しく、且つ、これらの土器群が堀之内１式段階に伴わないという論拠も、今日でも明確に示し得ないでいる。

近年、やや一括性に乏しいながら、武士遺跡例に類似する瓢形注口土器の出土例があったので、ここに示しておきたい（図７）。千葉県流山市花山東遺跡で住居跡の残骸と考えられる４号炉覆土内とその周辺から出土したもので、称名寺式土器第６段階程度の土器群との伴出例である。したがって、武士遺跡の瓢形注口土器の時間的位置も、概ね称名寺式期の終末であることがうかがえよう。下総台地での一括資料の類例としては、埼玉県岩槻市裏慈恩寺東遺跡３号

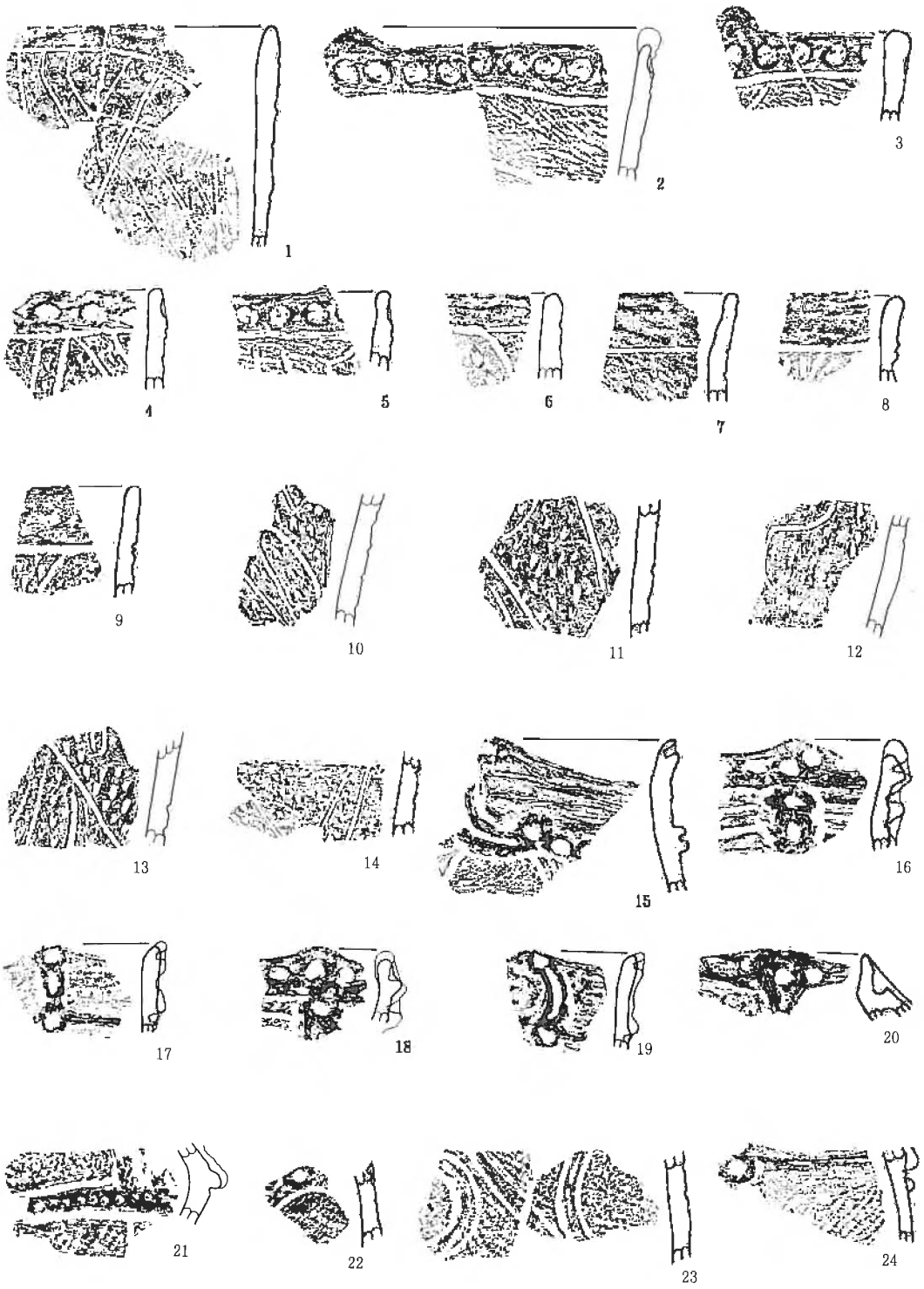

図６　千葉市有吉北貝塚後期斜面貝層出土土器群

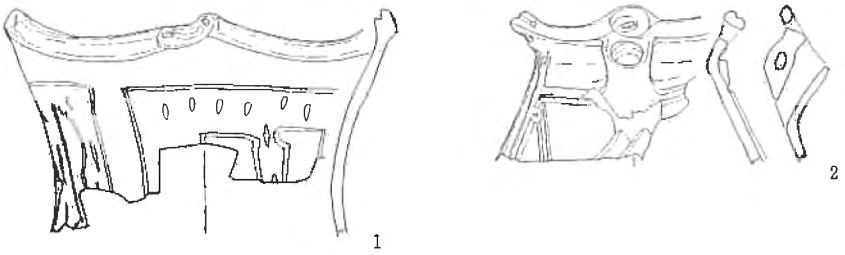

図７　流山市花山東遺跡４号炉出土土器群

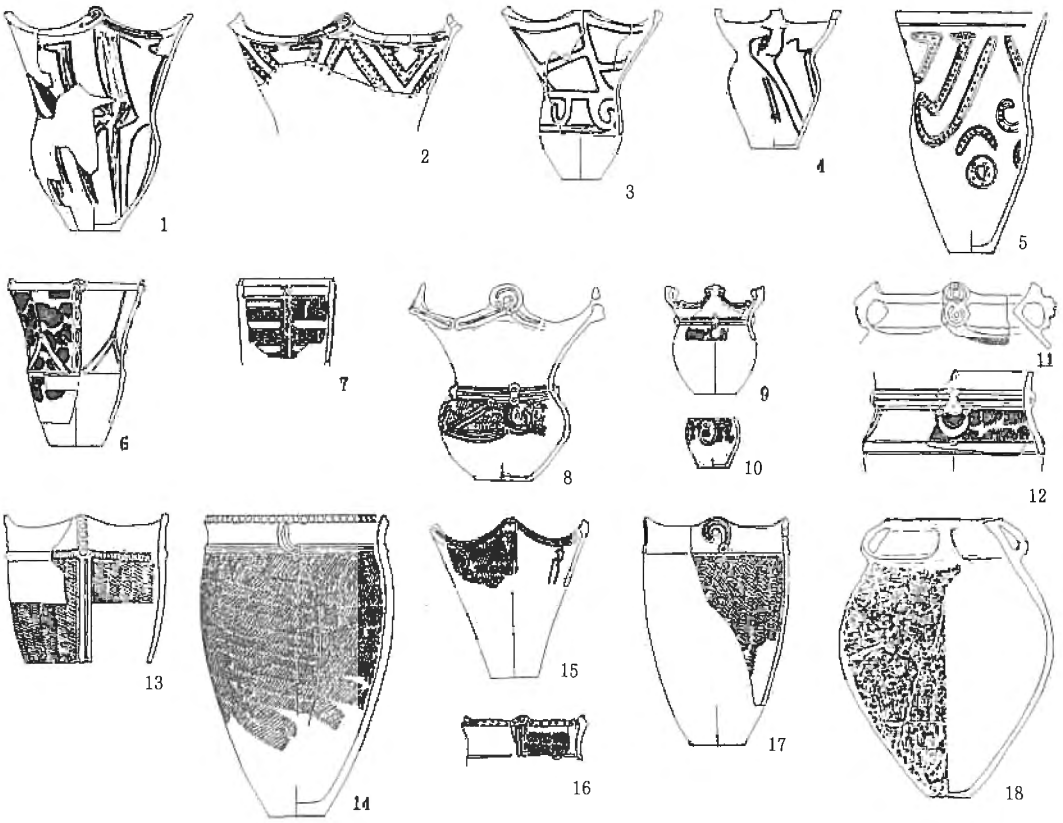

図８　横芝町鴻ノ巣貝塚出土土器群

住居跡出土例（並木1978　第14図－６）をあげることができよう。

ｃ　３類　北関東から東北地方南部に出自を求め得る土器群（図２－５～８）

３類とした土器群に類似する土器群は、鴻ノ巣貝塚例（図８－８～10）がある。稲村晃嗣氏が「綱取式・堀之内式系譜の土器群」の「６類」としたもの（稲村　1989）で、「関東北部から

図９　武士遺跡732号土坑出土土器群

東北地方南部に多くみられる土器群でその起源は加曽利Ｅ式との関連で論じる必要のある土器」として、その系譜関係の複雑性を示した土器群である。これらの土器群「以下、鴻ノ巣６類と略す」は、概ね石井寛氏の堀之内１式土器ＣＩ群（石井　1993）に繋がる土器群であると思われる。石井氏はＣＩ群の成立について「基本的には称名寺末期に「関沢類型」・称名寺式をベースとし、東北南部地域土器群の影響をも受けながら成立する」とし、鴻ノ巣６類の成立に関わる系譜関係の複雑さを暗示している。

鴻ノ巣６類の時間的位置づけは、鴻ノ巣貝塚の明確な一括性が示されていない以上、今後の類例を待たなければならないであろう。現段階では、１～５のような称名寺式終末段階に伴うものなのか、14あるいは15のような堀之内１式土器に伴うものなのか、判断は困難である。現

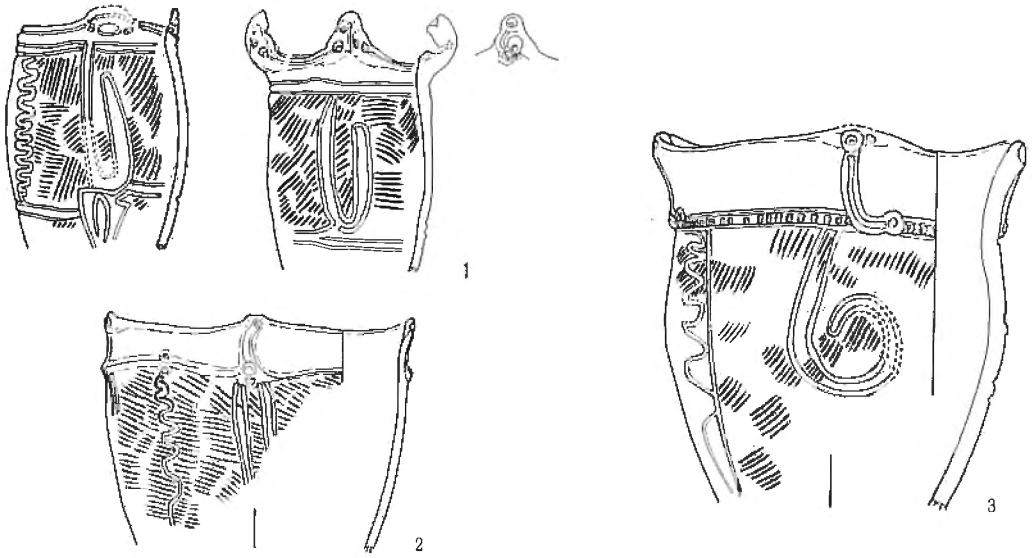

図10　千葉市木戸作貝塚出土土器群

段階では、鴻ノ巣６類に後続すると考えられる、東京都なすな原遺跡例（重久ほか1984第155図－２）が、石井氏の堀之内１式土器第１段階に相当することから、鴻ノ巣６類は、称名寺式最終末段階に位置づけて捉えられるべきであると考えられる。

このほかに、図２－５～８と同様の土器群であるとは言い難いものの注目すべき土器として、図２－９がある。９は胎土・焼成・沈線の雰囲気は、武士遺跡732号土坑例（図９－１）に類似する。同一個体の可能性が示唆できるほど酷似しているわけではないものの、時間的位置づけは極めて近いものと思われる。732号土坑例の２は堀之内１式土器的な様相が強いものの、破片を含めた全体的な位置づけとしては、明瞭な堀之内１式土器を含まない、称名寺式期最終末段階であると考えられよう。

ｄ　堀之内１式土器の定義について

ここまで、武士遺跡の関東系土器群（図２）の位置づけについて解説を行い、これらの土器群が、旧稿と同様、称名寺式最終末段階であることを確認した。ここでは称名寺式期最終末段階の確認をする意味で、筆者の堀之内１式土器の定義、特にその成立段階の定義について触れておかなければならないであろう。

筆者の堀之内１式土器成立段階の土器群は図10に示した千葉市木戸作貝塚出土土器群である。これらの土器群は、鈴木徳雄氏の「Ａ群甲１類」、「Ａ群／文様を単沈線によって描出、甲類／原則として文様意匠内を無文とする、甲１類／綱取式との著しい類縁関係を有する」土器群に相当（鈴木1982）し、図10に示したほかに、図12の千葉県市原市西広貝塚例などがある。鈴木

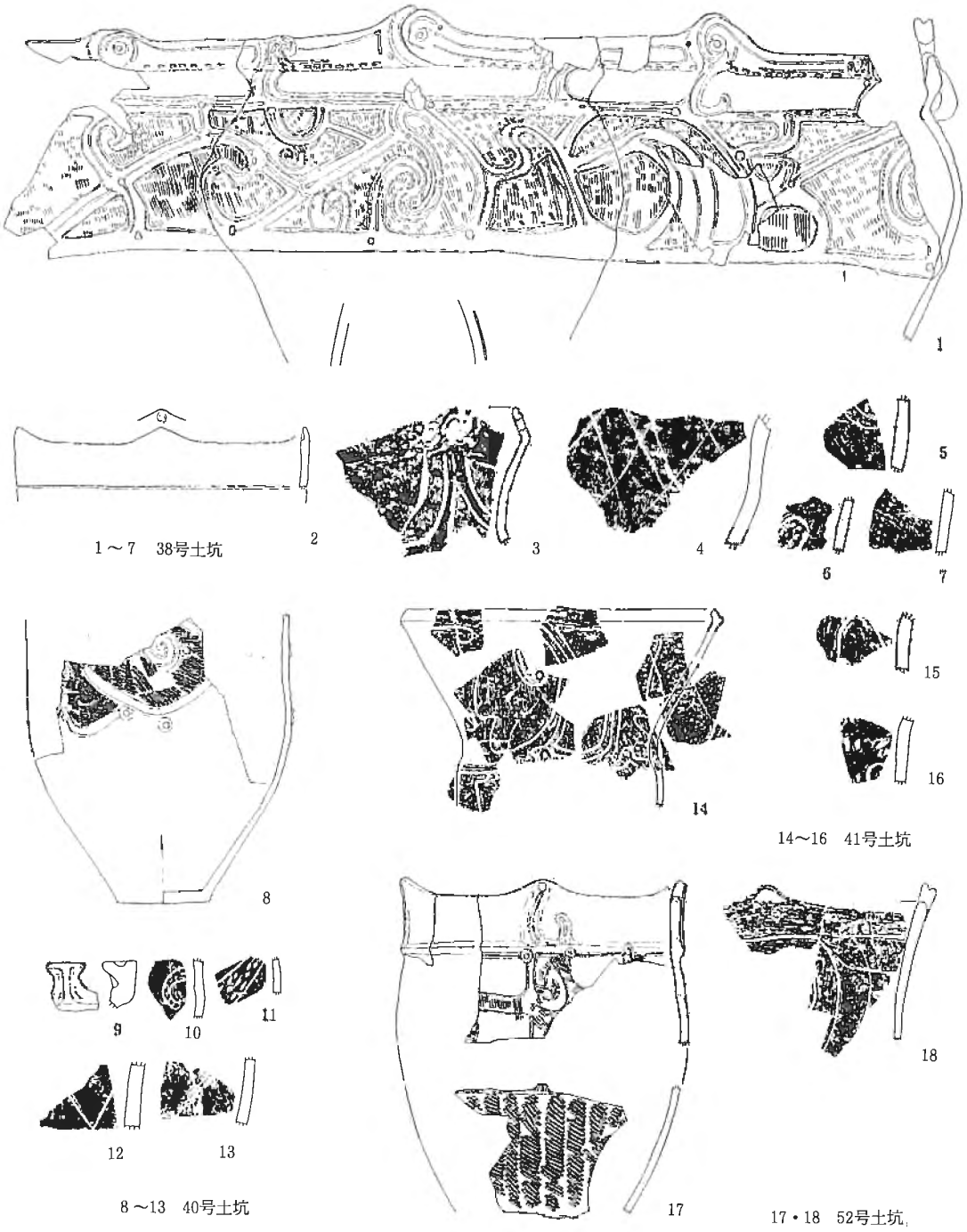

図11　成田市山口雷土遺跡出土土器群

氏はＡ群からＣ群にむけての変遷を、主に単位文効果の減少と、単位文の側線の増加という観点から論理的に編成し、研究者がひろく堀之内１式土器と認める土器群の変遷を、スムーズに示した。この変遷観は、資料の増加した今日においても有効であると考えられる。

筆者が、図10などの土器群を堀之内１式土器群の成立段階のものとして捉える理由は、鈴木氏が示した論理的な変遷観を、新段階（鈴木氏のＣ群）から古段階（鈴木氏のＡ群）にむけて捉えてみても、論理的に繋がりを追える土器群は、やはり図10に示した土器群（単沈線で意匠を描出し、単位文内は無文で、懸垂文的な性格に欠ける土器群）が限界であろうという判断からである。１は石井氏が（石井　1992）で指摘したとおり、同一個体の土器であるが、突起には称名寺式土器の要素が強く、胴部文様帯下端の区画文も当該期土器群のなかでは異質であるものの、単位文効果の減少と、単位文の側線の増加という観点から捉え返せば、堀之内１式土器成立段階の土器群として捉えられるものであろう。

たとえば、近年の資料の増加に伴い、堀之内１式土器成立段階の土器群を拡大解釈すると、下総台地ではその直前段階の著名な例である、成田市山口雷土遺跡出土土器群（図11）が堀之内１式土器の範疇に編入されることとなってしまう。17は堀之内１式土器的な様相を示してはいるものの、図10に示した土器群との断絶は大きく、この17を堀之内１式土器に含めるならば、おそらく同一段階であろうと考えられる１・８・14も堀之内１式土器の範疇に編入せざるを得ない事態となり、先述した、鴻ノ巣６類、有吉北貝塚例、子和清水遺跡例のみならず、図３・４に示した土器群や、武士遺跡711・712・732号土坑例も、安直に堀之内１式土器の範疇に編入されることとなってしまう。

称名寺式最終末段階の土器群が非常に錯綜した様相を示しており、北関東／東関東／南・西関東という地域差もさることながら、同じ千葉県内であっても、土器群の様相に大きな差がある点は、本稿で示した土器群で充分に理解できるものと思われる。それに比べ、従来の堀之内１式土器は、器種（類型）構成に地域差はあるものの、汎関東的に変遷を追える内容を有している。つまり、称名寺式期最終末段階での地域差・遺跡毎の差を、払拭・再編成するなかで堀之内１式土器が成立したものと考えられる。このように考えると、現段階では、従来の堀之内１式土器の枠組みの変更よりも、複雑な様相を示す称名寺式期最終末段階の土器群の系譜関係を明らかにし、従来の堀之内１式土器の成立過程を明らかにすべきではないかと私考する次第である。

3．関西での編年的位置

a　型式学的検討

旧稿では型式学的検討として、主に突起の分析を行った。具体的には、箆状の突起（図１－左　正面部）や正面観が三角形の突起（図１－中央・右　正面部）の分析を行ったが、確実にこれらの突起が中津式期の最終末であるという根拠を示すことはできなかった。かろうじて中期末の土器群や中津式土器の系譜上で生成している点について論証できたのみであって、関西系土器群が、中津式期の最終末であるという根拠を示すことはできなかった。旧稿の執筆以降に公表された類例を瞥見しても、未だに突起の分析からの明確な位置づけは困難であるといわざるを得ない。

旧稿での、もう一方の分析対象は胴部意匠であった。胴部主文様の大柄のＪ字状文の生成過程（図12－16から18へのながれに注目）や、底部付近までの主文様の垂下・拡大、さらには、帯縄文の幅が狭く、明瞭な一筆書き手法を採用しない点から、福田Ｋ２式土器に近接する時間的位置を与え、中津式期のなかでも新しい様相を示しているものと捉えた。現段階でもこの見解に変更はない。

ともあれ、武士遺跡の関西系土器群の型式学的方法による位置づけについては、今なお困難であると考えている。そのような状況を鑑み、旧稿では、以下に記す、東西の土器群の併行関係からの類推を行なったわけである。

b　併行関係からの類推

旧稿では図12を示し、東西の土器群の併行関係から、武士遺跡例の編年的位置を類推した。旧稿との重複は避けるが、併行関係を探る主要な定点としては、以下の３点があげられよう。

＊称名寺式土器と中津式土器との対応関係

称名寺式土器古段階（図12－１・４）と中津式土器14・15との対応関係については異論はないものと考えられる。称名寺式土器中段階の前半９と中津式土器16は、古段階に後続する段階で、縦位方向に意匠が展開する称名寺式土器と、横位方向に展開する中津式土器の分離が認められる段階として概ね一致するものと考えられる。旧稿でも指摘したとおり、16は９に比べやや新相であると考えられるが、他に良好な例が見あたらないので16を示しておいた。これによって、称名寺式土器中段階の前半までの両者の対応関係を示し、垂下隆帯の施される中津式土器21については、横位連携の完成した中津式土器であると同時に、関東での垂下隆帯の盛行する時期を勘案し、称名寺式土器中段階の後半に位置づけた。

これによって、称名寺式土器と中津式土器は、称名寺式土器中段階の前半までは概ね対応関係を示すことができ、可能性として、中段階の後半での対応関係を示すことができた。

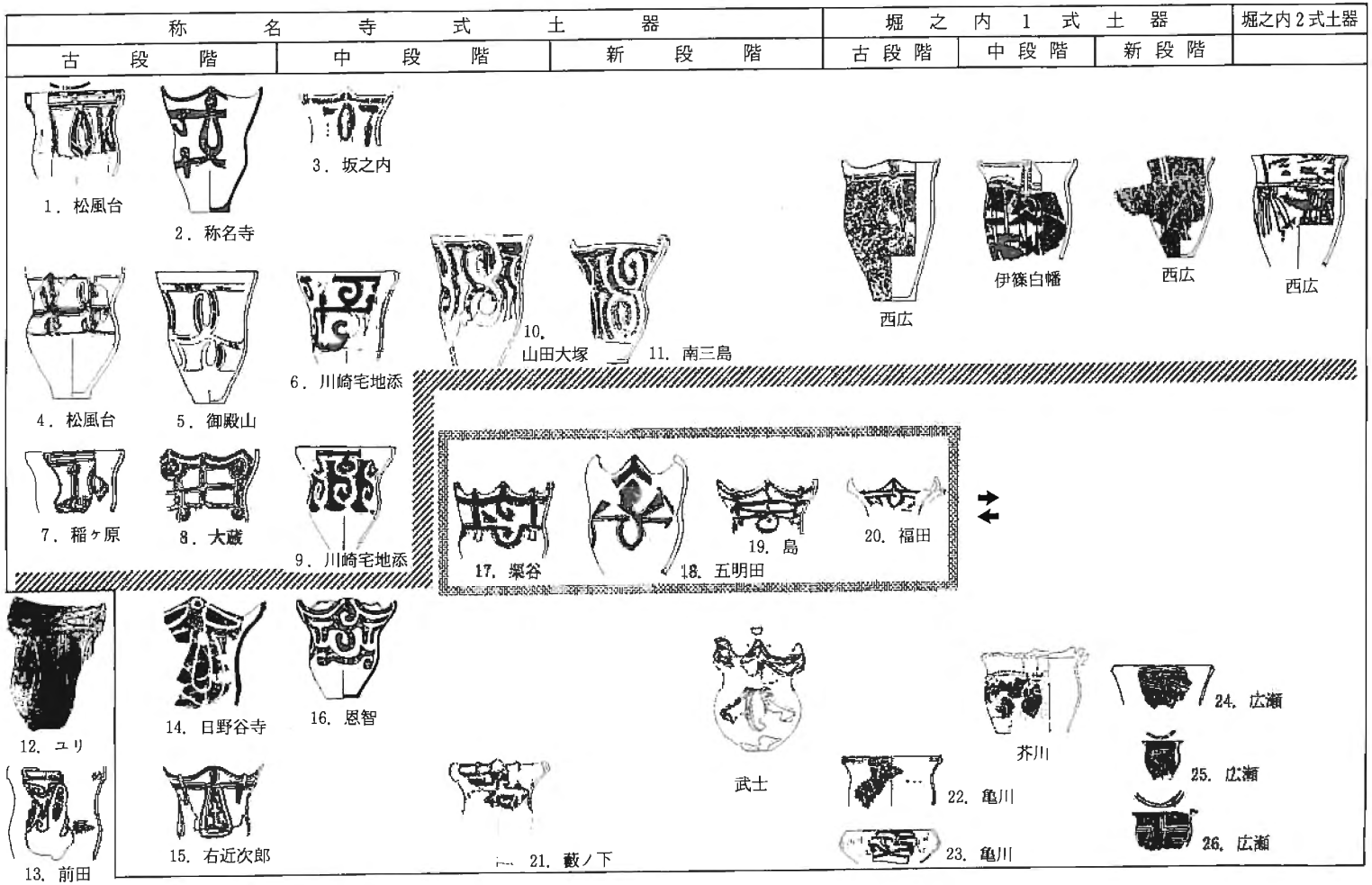

図12　東西土器群の併行関係（加納　1994を改変）

＊武士遺跡例

武士遺跡の関西系土器群（図１）が、伴出した関東北系の土器群（図２）から、称名寺式最終末段階に位置づけることができた。

＊奈良県広瀬遺跡40号土坑例

図12－24・25が、関東地方の堀之内１式土器の新段階に相当するものであることから、千葉豊氏の広瀬土坑40段階（千葉　1989）が堀之内１式土器新段階に位置づけられることが明らかになった。

このほかの定点としては、図12－22があげられる。22は胴部に称名寺式土器系譜の意匠が施され、口縁端部に明瞭な文様帯を有していることから、関東では概ね堀之内１式期にくだっている可能性が高いものである。

c　疑問点

上述した３点の定点についは、大きな異論はないものと思われる。そのように考えると、以下の大きな２点の疑問が生じることとなる。

＊福田Ｋ２式土器の位置づけ

筆者は旧稿で、武士遺跡例（図１）を中津式土器の新段階に位置づけ、現段階でもその認識に全く変更はない。千葉氏は「福田Ｋ２式再論」（千葉　1995　以下、再論と略す）中で、武士遺跡例（図１）の型式学的検討から、当該土器群を福田Ｋ２式土器第３段階（新段階～筆者）に位置づけた。この検討結果に従えば、福田Ｋ２式土器第１段階・第２段階が、称名寺式土器新段階の前半のうちに納まらざるを得ないこととなる。もっとも千葉氏は再論中で、図12－18を福田Ｋ２式土器第１段階と捉えているので、この点は矛盾はないであろうが、我々関東地方の研究者のイメージする３本沈線の典型的な福田Ｋ２式土器（千葉氏の福田Ｋ２式土器第２段階の土器群）の位置づけに疑問が生じることになる。

＊広瀬土坑40段階

広瀬土坑40段階とは、段階設定者の千葉氏によれば、「縁帯文土器成立期として広瀬土坑40段階を設定することによって福田Ｋ２式と縁帯文土器は編年的前後関係として捉えられる」（千葉　1989）とのことである。この論に従えば、称名寺式土器新段階の後半が福田Ｋ２式土器第３段階であることから、広瀬土坑40段階（堀之内１式土器新段階）までの、堀之内１式土器古段階・中段階に相当する関西地方の土器群が如何なるものであるのか疑問が生じることになる。また、広瀬土坑40段階が縁帯文土器成立段階であるのならば、図13に示した土器群や、これらの土器群に伴出する土器群は、明らかに縁帯文土器以前の土器群となってしまい、これらの土器群をどのように呼称したらいいのであろうか。

このほかの疑問点としては、千葉氏は広瀬土坑40を「堀之内Ｉ式(古)・(中)に併行する」（千葉　1987）としているが、その根拠は如何なるものなのであろうか。

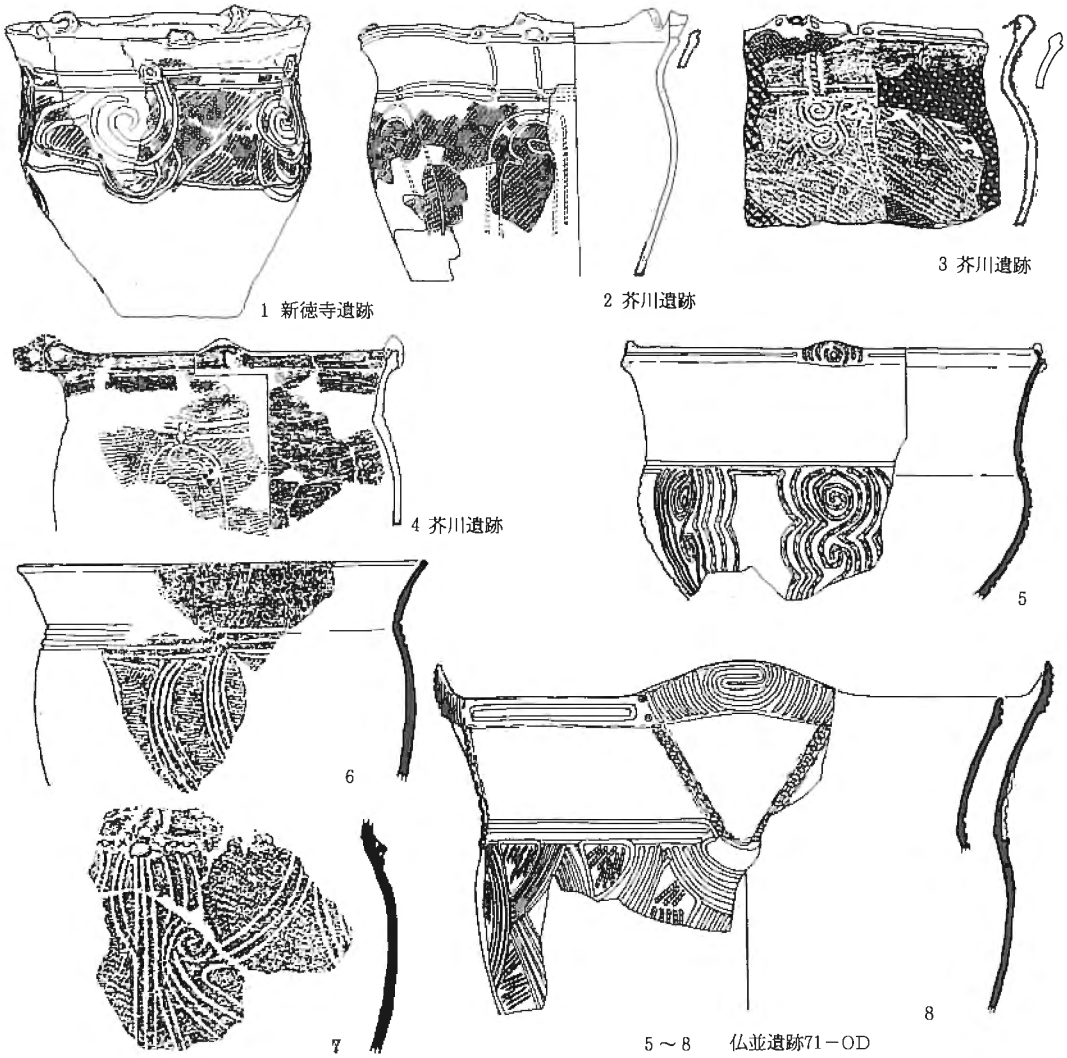

図13　近畿地方出土後期前葉の土器群

d　福田Ｋ２式土器の定義をめぐる諸問題

千葉氏が再論中や（千葉　1997）で述べているように、筆者も、２本沈線と３本沈線が、一方では、中津式／福田Ｋ２式という同一の系譜上の土器群の、時間差を示す要素であると同時に、他方では、福田Ｋ２式／宿毛式という同時期に存在する土器群の、地域差を示す要素であることは、理解している。また、千葉氏は再論中で「３本沈線の福田Ｋ２式期に２本沈線の文様が併存していたことを認めなくてはならないのである。」とし、その証左として広島県洗谷貝塚の層位例をあげているが、筆者も全く同感である。筆者も旧稿中で、称名寺式期から堀之内１式期にかけての段階が、中津式期から福田Ｋ２式期に対応する根拠として、京都府亀川遺

跡の２個体の土器（図12－22・23）を図示している。したがって千葉氏が再論中で述べるように、「２本沈線だから年代的に古いという観点は成立しない」のは当然であり、筆者も武士遺跡例を、２本沈線だから古いとは一切述べてはいない。突起と胴部のＪ字状意匠の検討から中津式土器の新しい部分との位置づけを行ったまでである。そして、併行関係の枠組みのなかから、武士遺跡例を称名寺式土器新段階の後半（称名寺式土器最終末段階）であるとの位置づけを行ったまでである。あくまで中津式土器から福田Ｋ２式土器という連続性のなかで、どの段階から福田Ｋ２式土器と認識・呼称するのかという点に関して、「３本沈線の獲得を目安」にしたい、と述べただけである。

筆者は基本的に、土器型式の規定については、共同主観を優先して捉えている。従って、従来の福田Ｋ２式土器成立段階の目安である「３本沈線の獲得」が、岡山県福田貝塚での検討（泉　1989）を経て、万が一却下されることとなっても、そこで示された新たな定義が、関西方面の研究者間の共同主観であるならば、筆者はそれに従うつもりでいる。しかし、図12－18が福田Ｋ２式土器であるとは、現段階ではなかなか納得しがたい。中津式土器と福田Ｋ２式土器の全体的な定義の設定のなかで、中津式土器終末段階と福田Ｋ２式成立段階の定義を明らかにする必要があろう。

ｅ　最新資料の位置づけ

旧稿執筆当時は、堀之内１式土器中段階に相当する土器群（主として堀之内１式系土器群）が少なく、また、図12でのスペースも考え、当該期の土器群に関しては、大阪府仏並遺跡71－OD出土土器群（図13－５～８）の存在について、簡単に触れたのみであった。近年、堀之内１式土器中段階（千葉氏の広瀬土坑40段階以前＝縁帯文土器成立以前）の良好な土器群（堀之内１式土器群・堀之内１式系土器群）が発表されている（図13－１～４）ので、ここに示しておきたい。

１は三重県新徳寺遺跡例である。純粋な堀之内１式土器とは捉え難いが、単位文基部の円形浮文や、渦巻文が独立してしっかりしている点、渦巻文相互を連携する斜行文が単沈線主体であることなどから、堀之内１式土器中段階以前であろうと思われるが、古段階に位置づけられる可能性もあろう。ただし、後述する２・４のような明瞭な堀之内１式土器ではなく、関西での影響を被っている堀之内１式系土器であろう。２・４は大阪府芥川遺跡例であるが、図12に図示した伊篠白幡遺跡例との対照で明らかなように、堀之内１式土器中段階のものであろう（２については図12中に示しておいた）。５～８は仏並遺跡例である。５～７は堀之内１式土器中段階のものであるが、２・４よりもやや新相であろう。８は堀之内１式土器新段階のものであろう。５～８も関東の堀之内１式土器に極めて近いという印象を受ける。

この他の例として、関東側での良好な事例が公表された。筆者は未見であるが、群馬県芳賀北曲輪遺跡例（図14－１）である。一括資料ではないが、武士遺跡例（図１　称名寺式土器第

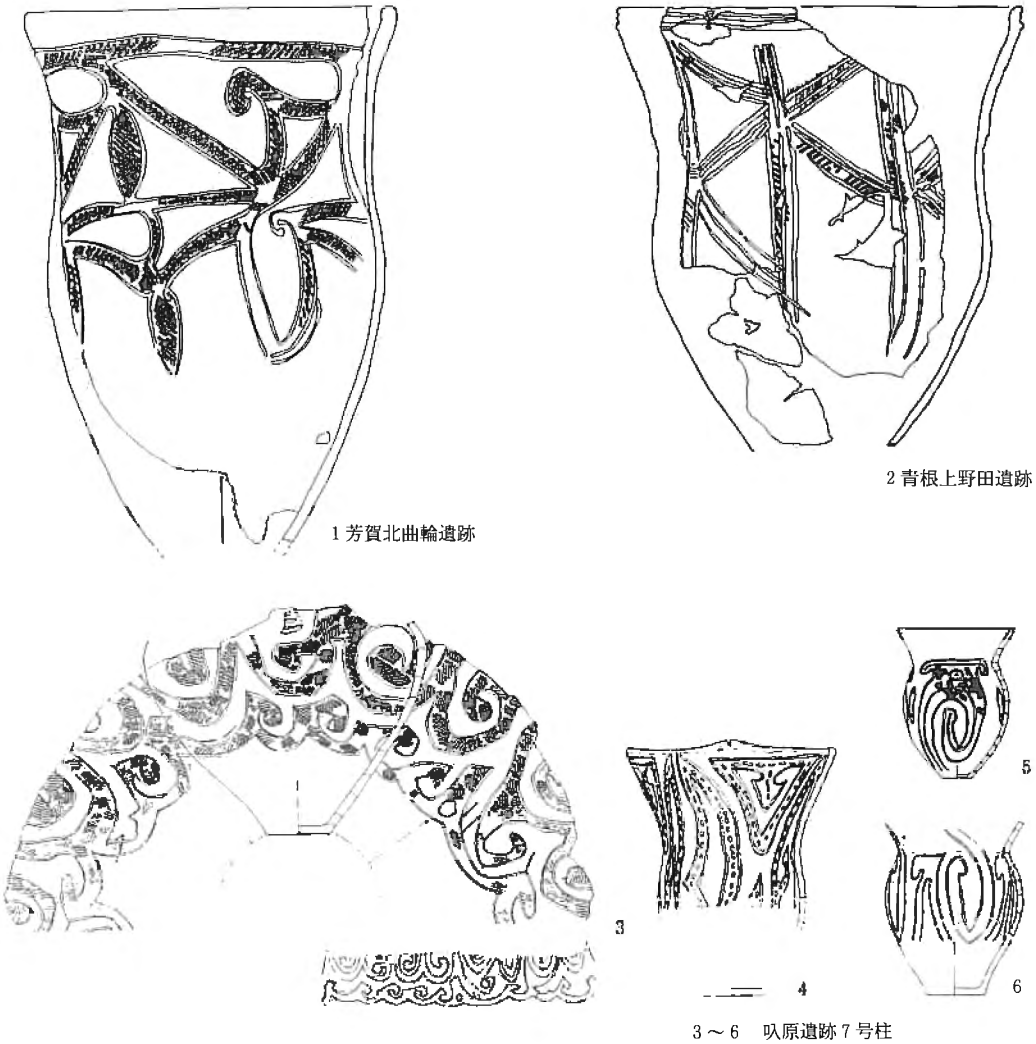

図14　関西地方との交渉関係を示す可能性のある土器群

7段階）よりも1段階古い段階（第6段階程度）に位置づけられるものであろう。図12の18と19の間を埋めるような資料であろう。

f　関西との交渉関係を示す可能性のある土器群

近年公表された、もしくは筆者が入手した資料のなかで、関西との交渉関係を示す可能性のある土器群があったので、ここに紹介しておく。

図14－2は神奈川県青根上野田遺跡例で、筆者は未見である。堀之内1式期中段階の懸垂文・斜行文が施される称名寺式系譜の土器（下北原式土器）である。下北原式土器は地文が無文であることが前提であり、このように沈線間に縄文が施される例を筆者は知らない。通例では認められない様相（下北原式土器の沈線間への縄文施文）の解釈のひとつとして、3本沈線内の

縄文施文がなされている地域との交渉関係のうえで成立している可能性も考えておかなければならないであろう。

図14－3は埼玉県叺原遺跡例で、筆者は未見である。4～6と伴出したものである。4・6から、これらの土器群は称名寺式土器第5段階から第6段階（新段階の前半）程度の位置づけが可能であろう。ここでは3の胴部下端の横位の帯縄文が注目される。帯縄文以上の意匠は、称名寺式土器第5段階程度の意匠であるが、関東のこの段階での、横位の帯縄文が文様帯下端に施される例を筆者は知らない。やはり、通例では認められない様相（文様帯下端の横位の帯縄文）の解釈のひとつとして、中津式土器との交渉関係のうえで成立している可能性が考えられる。図12－16の恩智遺跡例に後続する段階に位置づけられると思われる。

4．おわりに

繰り返しはさけるが、上述した疑問や現状を考えると、筆者は、図12に示した大局的な併行関係の枠組みに、変更を加える必要はないと考えている。旧稿でも示したように、

＊武士遺跡例（図2）は称名寺式土器最終末段階に位置づけられる。

＊武士遺跡例（図1）は中津式土器新段階に位置づけられる。ただし、型式名称の問題は、近

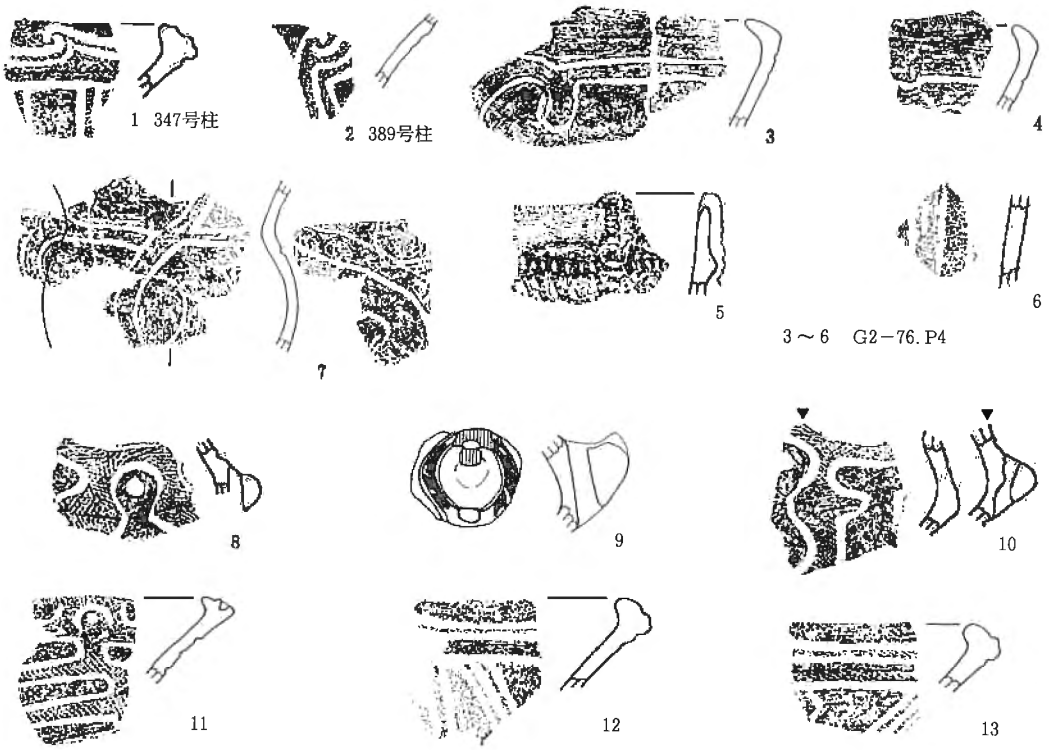

図15 武士遺跡出土関西系土器群

年の動向を踏まえれば、今後の関西方面での定義の定着次第であるといわざるを得ない。

＊３本沈線の典型的な福田Ｋ２式土器は、やはり、堀之内１式期古段階以降に位置づけられるものであろう。

＊広瀬土坑40段階は、堀之内１式期新段階のものであり、縁帯文土器成立段階ではない。

という点が再確認された。また、旧稿で示したように、堀之内１式期古段階での福田Ｋ２式土器と縁帯文土器との併存の可能性も、視野に入れるべきであると考える次第である。

最後に、武士遺跡で出土した図１以外の関西系土器群のうち主要なものを紹介しておきたい(図15)。１・２は福田Ｋ２式土器で、共に住居跡からの出土である。住居跡の時期は、共に覆土出土土器群の主体時期である堀之内１式期を充てたが、前後の段階の土器群も多く含まれていることから、確定はできないでいる。３～６はピットからの一括資料である。３・４は中津式土器新段階のものであろう。６は沈線間に列点が充填される称名寺２式土器である。７～13は遺構外出土で、７は中津式土器新段階のものであろう。８～10は中津式期から一部は福田Ｋ２式期の可能性がある両耳壺の把手部（耳部）の破片であろう。11～13は福田Ｋ２式土器であろう。

武士遺跡例でも明らかなように、近年の資料増加により、今後、東西土器群の併行関係の把握が一層進捗して行くものと思われる。その際に注意すべき点としては、純粋な型式論のみで個別の土器に評価を与えるのではなく、大局的な併行関係の把握のなかで、編年網の枠組みを設定しつつ、そのなかで型式論との辻褄合わせを常に行うことであろう。また、他地域の土器については、実見を重ねながら学び続ける姿勢が必要であろう。これは、自らへの戒めの言葉として真摯に受けとめておきたい。

（財団法人　千葉県史料研究財団）

謝　辞

本稿を草するにあたって、石井寛氏には称名寺式終末段階および堀之内１式古段階の土器群の認識について多くのご教示を得ることができた。また、鈴木徳雄氏には関西方面の土器群の位置づけについて、稲村晃嗣氏には鴻ノ巣貝塚出土土器群をめぐる諸問題について、多くのご教示を得ることができた。日頃の学恩も含めて深く感謝する次第であります。また千葉豊氏には、京大蔵の資料の実見や、武士遺跡出土資料の実見を共にする機会に幾度か恵まれ、その合間に多くの議論を交わすことができ、関西縄文土器研究の現状や、最新資料の入手についても多くのご教示を得ている。さらに、近藤敏氏・山田和仁氏・渡辺新氏からは、文献および情報収集で御協力を頂戴することができた。末筆ながら深く感謝する次第であります。

最後に、図版の作成に際しては下田久美子氏の協力を得た。また、毎度のことながら、文献の検索・入手については（財）千葉県文化財センター司書の平川裕子氏の手をわずらわせた。多謝。

参考・引用文献

石井　寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」
『調査研究集録』第９冊　（財）横浜市ふるさと歴史財団

石井　寛 1993 「堀之内１式期土器群に関する問題」
『牛ケ谷遺跡　華蔵台南遺跡』　（財）横浜市ふるさと歴史財団

泉　拓良・玉田芳英 1986 「文様帯系統論―縁帯文土器―」『季刊考古学』第17号　雄山閣

泉　拓良 1989 『福田貝塚資料』　奈良国立文化財研究所

糸川道行 1998 『流山市花山東遺跡』　（財）千葉県文化財センター

稲村晃嗣 1988 「鴻ノ巣貝塚出土の縄文時代後期初頭の土器群（補遺）」
『村上徹君追悼論文集』村上徹君追悼論文集編集委員会

稲村晃嗣 1989 「鴻ノ巣貝塚出土の縄文時代後期初頭の土器群」
『考古学の世界』慶應義塾大学民族考古学研究室

岩崎二郎 1986 『仏並遺跡』　（財）大阪府埋蔵文化財協会

岩崎二郎 1988 「仏並遺跡71－ODの縄文土器」『研究紀要１』　（財）大阪府埋蔵文化財協会

大野康男 1987 『山口雷土遺跡』　（財）千葉県文化財センター

小笠原永隆ほか 『千葉東南部ニュータウン19　有吉北貝塚Ⅰ』　（財）千葉県文化財センター

岡本東三 1995 『千葉県館山市大寺山洞穴第２次発掘調査概報』千葉大学文学部考古学研究室

岡本東三 1998 『館山市大寺山洞穴発掘調査報告書２』　館山市教育委員会

忍澤成視 1999 『祇園原貝塚』　（財）市原市文化財センター

小濱学ほか 1997 『新徳寺遺跡』　三重県埋蔵文化財センター

金子浩昌ほか 1958 『鉈切洞穴遺跡』　千葉県教育委員会

金子正人ほか 1990 『芳賀北曲輪遺跡』　前橋市埋蔵文化財調査団

加納　実 1986 「中津貝塚出土土器の抱える問題点」
『研究連絡誌』第18号　（財）千葉県文化財センター

加納　実 1990 「千葉県における縄紋後期前半土器型式研究の課題」
『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会

加納　実 1994 「縄文時代後期・関西系土器群の新例」
『研究連絡誌』第39号　（財）千葉県文化財センター

加納　実 1998 『市原市武士遺跡２』　（財）千葉県文化財センター

加納　実 1999a 「第３回原始文化研究会の岡本勇先生のメモ」
『土曜考古』23号　土曜考古学研究会

加納　実 1999b 「縄文時代（関東）」
『月刊考古学ジャーナル５月臨時増刊号 1998年の考古学界動向』ニュー・サイエンス社

喜多裕明 1998 『宮内井戸作遺跡１地区』 （財）印旛郡市文化財センター
郷田良一ほか 1982 『千葉東南部ニュータウン７－木戸作遺跡（第２次）－』
（財）千葉県文化財センター
郷田良一ほか 1982 『千葉東南部ニュータウン10－小金沢貝塚－』（財）千葉県文化財センター
河野喜映 1994 『青根上野田遺跡』 （財）かながわ考古学財団
重久淳一ほか 1984 『なすな原遺跡－No１地区調査－』 なすな原遺跡調査会
鈴木徳雄 1982 「３．南関東東部」
『シンポジウム堀之内式土器資料集』 市立市川考古博物館
鈴木徳雄 1990a 「称名寺式土器」『調査研究集録』第７冊 横浜市埋蔵文化財センター
鈴木徳雄 1990b 「称名寺・堀之内１式研究の諸問題」
『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
鈴木徳雄 1991 「称名寺式の変化と文様帯の系統」 『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会
鈴木徳雄 1992 「縄紋後期注口土器の成立」 『縄文時代』３ 縄文時代文化研究会
鈴木徳雄 1993 「称名寺式の変化と中津式」 『縄文時代』４ 縄文時代文化研究会
田中英世ほか 1987 『子和清水遺跡 房地遺跡 一枚田遺跡』 千葉市教育委員会
玉田芳英 1989 「中津・福田ＫⅡ式土器様式」 『縄文土器大観』４ 小学館
千葉 豊 1989 「縁帯文系土器群の成立と展開」 『史林』72巻－２号 京都大学文学部
千葉 豊 1990 「第５章近畿北部・山陰東部の成立期縁帯文土器」
『小森岡遺跡』兵庫県城崎郡竹野町教育委員会
千葉 豊 1992 「西日本縄文後期土器の二三の問題」 『古代吉備』第14集 古代吉備研究会
千葉 豊 1995 「福田Ｋ２式再論－千葉県武士遺跡出土の「関西系土器」の評価－」
『古代吉備』第17集 古代吉備研究会
千葉 豊 1997 「福田Ｋ２式と宿毛式・序論－型式弁別の視点について－」
『古代吉備』第19集 古代吉備研究会
並木 隆 1978 『裏慈恩寺東遺跡』 埼玉県遺跡調査会
橋本久和 1995 『芥川遺跡発掘調査報告書－縄文・弥生集落の調査－』 高槻市教育委員会
花輪 宏ほか 1987 『堀之内』 市川市堀之内土地区画整理組合設立準備委員会ほか
吉田健司ほか 1985 『叺原遺跡（先土器・縄文時代編）』 川口市教育委員会